
ポケモン不思議のダンジョン 絆の探検記

凜月波音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 絆の探検記

【Zコード】

Z3456W

【作者名】

凜月波音

【あらすじ】

目が覚めたらピカチュウになっていた少年ユウキと、海岸でユウキが出会ったイーブイのカノン。一匹は探検隊を結成する。これは、とある探検隊の奇妙で壮大な冒険を綴った物語。

プロローグ

「……何、どうなんだ？」

少年は唐突にそう思った。

上下の感覚はとっくに消失しているが、不思議と心地良い。

だがその時、いきなり強い力で振り回されるような、不快な浮遊感に襲われた。頭がくらくらして、さっきから辛うじて繋ぎ止めていた意識の糸が途切れそうになる。少年は咄嗟に全身に力を込めて意識を繋ぎ止めようとするが、限界はすぐにやつてきた。

「もう……駄目だな……」

少年が全身の力を抜くと同時に、少年の意識もスイッチを切るようにな途切れた。

目が覚めて、少年は自分が海岸りしき場所にいることを悟った。

「う……？」

「……ううん……」

頑張つて身体を起しそうとするが、目の前がちかちかしてすぐに地面に倒れてしまう。仕方なく少年は立ち上がるのことを諦め、再び目を閉じた。

プロローグ（後書き）

「こんにちは、凜月波音です。もしくは駄作者ともいいます。

更新は不定期ですがテンションが高いとペースがなんか急に速くな
った……りするかどうかは分かりませんごめんなさい。orz
趣味で亀更新の癖に感想書いていただけると飛び上がって喜びます
厳しいのも優しいのもおーるうえ いづで受け付けております。

では、どうかこんな駄目人間を生温かい目で見守ってやってください（笑）

第1話 海辺の田舎ごと（前書き）

時間がベースなのにイーブイが出てくるのは
・作者がイーブイ大好き
・なのに空をプレイしていない
これが原因です……許してやってくださいお願いします oren

第1話 海岸の出会い

「はああああ……」

夕陽色に染まったプクリンのギルドの前で、一匹のイーブイが大きく溜息をついた。ウサギのような形の耳とぞぞかし触り心地の良いであろうシシボも、一緒にうらうと垂れる。

「今日も駄目だったなあ……ううう、どうすればいいんだろ……」

やがてふるふると身体を震わせると、イーブイは呟いた。

「よし、明日出直す。今度こそ……一十五回戻してなんかキリがいい。あとと上手く……いったら、いいなあ……」

その後、自分の住処に帰るつもりが、イーブイはいつの間にかギルドの南西にある海岸に来ていた。

「わあ……」

そこに広がる景色に、思わず感嘆の声を漏らす。

夕陽の元々の美しさに加え、海岸に生息しているクラブの吹く泡と海が夕陽を反射し虹色に輝いていて、幻想的な風景を作り出していた。

「こんなに綺麗なのは久し振りに見たよ……ん？ なんだあれ？」

岩の陰に、何やら黄色い物体が転がっていた。駆け寄つてみると、

「え…？ つてこれ、ピカチュウ？ しかもなんか……息してないよ…？ えええ…？ ちょっとどうじょ…？ 誰か、そこら辺に仲間とかいないの…？」

イーブイが一匹でパーティに陥つて叫びまくつていると、件のピカチュウがもぞもぞと動いた。そして、「ん……」と呟きながら口を開ける。だが、イーブイはそれに気づかずまだ叫んでいた。

「えー…？ ちょっとそれじゃボクが疑われちゃうよ… ほら何だつけ、えーとその……そう！ 第一発見者つて疑われるじゃない！ やだよ、ジバコイル保安官に職質されちゃ……あれ？」

ようやく気づいた時には、ピカチュウは可哀想な人ポケモンでも見るかのよつ眼差しでイーブイを見ていた。

「……あれ？ お、起きてたの？ 起きてるなり、と、起きてるつて言つてよ… 寿命が縮んだよお」

「…………」

叫んでる姿があまりに哀れで声をかけるのがためらわれました、とは言えなかつた。

「……んー、まあ……いいか。で、お前、誰？」

「誰とは失礼な……。ボクはカノン。自分のことボクつて言つてるからよく間違えられるけど、だよ。ちなみにイーブイの平均より少々小さめサイズ。君は？」

「声で分かるだろ、普通。んで、俺はコウキ……まではいいんだが」

「が？」

「誰かさんのせいで驚くタイミングを掴み損ねたんだが、俺は二ングンのはずなんだよ。内心かなり吃驚してるんだけどわ、誰かさんのせ」

「それはいいとして、何、元二ングン？ そんなの聞いたこと無いけど？ ううん、もしかしてボクを騙そうとしてる？ でも無駄だよ、ボクは金持^{ポケ}ぢゃないもん」

「騙すためにそんな突飛な言い訳をする詐欺師がビ^ビにいんだよ、お前にすらあからさまに疑われてんぢゃねえか」

「うう、それもやうだな。……で、これからどうするつもり？？」

「どうするって…どうじょうもねえよ。そもそもまだ自分がポケモンになつたことすらよく分かんねえしさ」

「ウキはそこで言葉を切り、空を見上げる。遠くにキヤモメの群れが見えた。

「うーん……あ！ そうだよ、それがいいよー。けつてーつー。」

「いや、一人で決めるなよ。俺は何も分からんぞ」

「うん… あのね、」

カノンは満面の笑みで、右前足をユウキにびしひと突き出す。

「ボクと一緒に、探検隊やればいいんだよ。」

「……はい？」

「聞こえなかつた？だから、ボクと探検隊やるうつよつて言つてゐるの。ブクリンのギルドに弟子入りすれば住み込みで働くことになるし、こ飯もギルドで出るし。あそこはちょっと怖いけど……でも、なんかユウキと一緒になら何とかなる気がするんだもん！だから、ね？ 探検隊やろ？」

「…………まあ、いいけど……」

「やつたあ！ ユウキありがとー」

ユウキは飛び跳ねながらシッポをピコピコ振つてゐるカノンを尻目に、そんな風に見つめられたら何も言えません、と誰にも聞こえないように恥じてゐた。

第1話 海辺の田舎ご（後書き）

最初から読みにくいですね…「めんなさい」（汗
とりあえず、基本原作通りでちょこちょこオリジナルを入れたいな
と思っております。
こんな駄文しか書けない駄作者ですがどうぞ宜しくお願ひします。

カノン「ねえ凜月、夏休みの宿題、まだ結構残ってるよね？」

「うぐ。なんでそれを知つてなおかつそこにいるんだ……」

カノン「調べ物してたのに、気がつくと小説読んでるんだもん。分
かるつて。さて、まだやらないよつならお仕置きしないこと……」

すこませんでしたああ（逃

第2話 プクリンのギルドにて

一匹は海岸を離れ、プクリンのギルドの前にいた。『ひつやり』のギルドに弟子入りして、探検隊修行をするつもりらしい。

プクリンをかたどつた屋根はどう見ても「よつこわー」と言つて、いるようにしか見えないのに、入り口は厳めしい鉄格子で閉ざされている。おまけに足元には、木で出来た謎の格子がはまつていて、ユウキにはそれが入るうとする者の恐怖を煽つて、いるよつにしか見えなかつた。

(うーん、何と言いますか……強いて言えば悪趣味、つてどこか)

プクリン型の建物といつ、自分の常識の中には無かつた物をユウキが呆れたような顔で見て、いると、

「ユウキ……先入つて……」

「へタレかお前はー！」

「はー。へタレです」

「認めたつ！ こいつ認めたし！ しかも探検隊がへタレつて、いるさか問題ありだぞ！」

「うー……」

「しゃーないな、先入つてやるよ。ユウキ様は優しいから」

「自分で言つか普通…？」

「わやんわやん騒ながら、コウキはやりつと格子の上に足を乗せる。見た田とは裏腹にかなり丈夫に出来ていいらしく、コウキが乗つたくらいでは音を立てる」とすら無かつた。ふう、と溜息を漏らして安心したのも束の間、今度は足元から聞こえてくる声に驚かされる羽目になる。

「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

「誰の足型？ 誰の足型？」

「足型は……えーと… 足型はあ……あー 多分ピカチュウ… 多分ピカチュウ！」

「多分って何だ多分ってー はつきりしないー。」

「だつてピカチュウとかこの辺にいないし… 分かんないですよ？ そこに乗れ」

「確かにこの辺じゃ見かけないがな…まあいい。もう一匹いるな？ そこに乗れ」

コウキが退くと、カノンはおかるおかる足を乗せる。心なしか震えているようだ。

「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

「ひやー！」

カノンが変な悲鳴を上げた。だが足元の声はそんなことは気にも

留めず、やりとりを続いている。

「誰の足型？ 誰の足型？」

「足型はイーブイ！ 足型はイーブイ！」

「よし、入れ！」

「え？ 入れって、閉まつて……」

力ノンが言いかけると、突然地響きがした。驚く二匹をよそに、
がががががと鉄格子が開いていく。

「…………」

「……まあ、入るか」

「ウキは建物に入るだけでこんなに驚かされなきやいけないのか
この世界は、と眩いでギルドの入り口をくぐる。力ノンも慌ててそ
の後に続いた。

二匹が梯子を降りていくと、そこにはカラフルな鳥が待っていた。
頭は音符の形をしている。

「ああ、さっき入ってきたピカチュウとイーブイはオマエたちのこ
とか？ ワタシはペラップ。ブクリン親方の一番の子分であり、ギ
ルドーの情報通だ。勧誘やアンケートならお断りだよ、ほら帰つた
帰つた」

「違うよー。ボクたち探検隊になりたくて、弟子入りしに来たんだよー。」

門前払いを食わされかけ、カノンがペラップに猛抗議する。

「なつー!? で、弟子入り…だとー?」

（今時探検隊になりたいなんていう輩なんて滅多にいないよ、寧ろ最近脱走しようとする奴も多いとここのに、なんて物好きな奴らなんだ……）

「おーいペラップ、ここの修行ってそんなに毎日ほど厳しいのか?」

「そ…そそそそそんな訳無いじゃないか ギルドの修行はひとつでも樂ちん 弟子入りしたいならさつさと貰えばいいのに、か、行くよ」

態度を一瞬にして豹変させたペラップだった。

「何やつてんの? ほら早く早く」

そして一匹を置いて、一匹で梯子を降りていってしまう。

一匹は顔を見合わせ、ペラップの後を追つた。

第2話 プクリンのギルドにて（後書き）

ユウキの記憶喪失は、何もかも忘れているのではなく人間だつたときの思い出を忘れているだけなので、前の知識などはある程度覚えています。

第3話 探検隊“カノープス”結成！

「「」はギルドの地下一階。主に弟子たちが働く場所だ。チームの登録は「」だよ。まあ」

ペラップはそつそつとまた歩き出し、あるドアの前で止まった。

「あー、「」が親方様の…」

「わあ！ ねえコウキ、「」地下一階なのに外が見えるよー。」

「ワタシの台詞を遮るんじゃない！ そしていちいちはしゃぐなー。」

怒鳴られて、カノンはしゅんと耳とシップを垂らす。

「「」のギルドは崖の上に立っているから外が見えるんだよ。まあ、「」が親方様の部屋だ。くれぐれも粗相の無いようになー。」

ペラップはしっかりと釘を差すと、そつそつとドアを開けた。

「親方様……。ペラップです。入ります」

部屋に入ると、一匹のポケモンが入り口に背を向けて立っていた。ピンク色で、ウサギのよつた耳がついている。

「親方様。」ちらが新しく弟子入りを希望している者たちです」

ペラップがそう告げる。が、いつまでたってもブクリンは振り向くどころか微動だにしない。

「親方様……………親方様？」

(「……寝てんのか?」)

「ウキの頭の上を疑問符が旋回し始めた時、突然プクリンが振り返った。

「やあっ!…ボク、プクリン　　いの、ギルドの親方だよ?」

「　　……」

しばしの沈黙が流れたのにも構わず、プクリンは続ける。

「君たち探検隊になりたいんだって?　じゃ、一緒に頑張ろうね!…
どうせやうとしてもフレンチリーなお方のようだ。」

「えーと、とりあえず最初に探検隊のチーム名を登録しなきゃいけないんだよね。君たちのチーム名を教えてくれる?」

「チーム名?　考えてなかつたな……カノン、何かあるか?」

「……カノープス。ボクの一番好きな星の名前なんだけど……いいかな?」

「ああ。オッケーだ」

「じゃあ“カノープス”でいいね?　リーダーは誰?」

「ユウキです

「えー? ちよ、おい……」

「決まりだね といひへ といひへ みんなといひへ……」

「オマエたちつー 何も言わずに耳を塞げつー」

ペラップが必死の形相で叫んだ。ほほ条件反射的に「匹は自分の耳をガードする。

「たあ――――――――――――――――――――――――――――――」

突然、超破壊力のハイパー・ボイスが飛来した。耳を塞いでいても鼓膜が破れてさらに吹っ飛ばされそうだが、一二匹は何とか耐える。

(ぎ、ギルド全体が揺れてるっぽいし上から何かぽろぽろ落ちてくるぞ……有り得ん)

ユウキは衝撃波に必死に耐えつつ、そんなことを考えていた。

やがてハイパー・ボイスが止んで、衝撃波と地震もぴたりと止まる。わつきまで騒がしかった外がなぜか急に静まり返っていた。

「おめでとう! 今日から君たちも探検隊の仲間入りだよ 記念にこれをあげるよ

だが当の本人は何事も無かつたかのよつこどこからか箱を取り出していく。そして、ユウキの前に置いた。

「さ、開けてみて」

言われるままに箱を開けると、布製の何かや紙などが詰まっていた。

「わあ～！ 色々入ってる！」

カノンがはしゃいで、箱からそれらを出す。プクリンが一つずつ指差して言った。

「まず、それは探検隊バッジ。探検隊の証で、救助したポケモンをダンジョンから脱出させたり自分たちが脱出することも出来るんだ。その紙は不思議な地図。とっても便利な地図だよ。そして最後にトレジャーバッグ。ダンジョンで拾った道具を入れておけるんだよ。あと、トレジャーバッグは君たちの活躍によつて、だんだん大きくなつていいくといつ…とても不思議なバッグなんだよ」

嬉しそうに探検隊バッジを眺めているカノンを、これまた嬉しそうにプクリンは眺めている。

「ん？ トレジャーバッグの中にはか入ってるぞ？」

「あ、そうそう、その中に入っているのはパワーバンダナとキトサンバンダナ。それぞれ身に着けると、攻撃と特防が上がるバンダナだよ。きっと君たちの冒険に役立つと思つよ」

「あ、ありがとうございます！ ボクたちこれが #」

「……俺たちこれから頑張ります」

興奮しそうで口調を囁んだカノンを、コウキが何とかフォローする。

「うん。でもまだ見習いだから頑張って修行してね」

「はいー。コウキ、頑張ろうねーーー！」

「ああー！」

その後。

「巨はねペラップに連れられて、一番奥の弟子部屋にいた。

「ソリがオマエたちの部屋だ」

「あー。ベッドだあー。」

ばふ、とカノンが藁のベッドにダイブした。藁が一、三本宙を舞う。

「これからオマエたちには住み込みで働いてもらつ。明日から忙しいぞ。早起きもしなきやいけないし、規則も厳しい。もう夜遅いから、夜更かししないでちゃんと寝るんだぞ。じゃあな」

ペラップはそう言い残して去つていった。

「ウキは脇でまだ藁のベッドと戯れているカノンをちらつと見ると、自分もベッドに潜り込んだ。藁のベッドも、意外と悪くない。

「あ、コウキもひ寝るへ。」

「俺は寝る。疲れたしな」

「じゃあボクも。お休み

「お休み」

一匹の余話が切れるごとに、途端に静寂が部屋を支配する。外からわずかにホーホーの鳴き声が聞こえていた。

「…………ねえ、コウキ。まだ起きてる?」

「…………」

コウキは実はまだ起きていたが、敢えて寝たふりを選択する。

「あ、もひ寝けやったのかな…? まあいいや。……ボク、今日はずっとドキドキしてたけど、やつぱこに来てよかつたな。ブクリン親方も意外と優しそうだつたし……」

カノンは少し言葉を切り、続ける。

「明日から色々ありそうな予感はするけど、そんなに怖くないんだ。それどころか、これからどんな冒険があるのかなって、楽しみながらい。それに……ボクにはわ、……コウキがいてくれるから。一匹じゃ怖いかもしねんだけど、一匹なら……大丈夫だと思うんだ」

さすがに限界なのか、カノンはふああ、と小さな欠伸をした。

「ふああ……。眠くなつてきちゃつた……。じゃあ、明日から頑張ろ
うね……。お休み、コウキ……」

少し経つと、カノンは規則的な寝息を立て始めた。カノンが寝たことを確認して、ようやく身体の力を抜く。

（なんだかんだであつという間に、ギルド弟子入りしちまつたよな……確かに探検隊とかいうのも楽しそうだが、それよりなんで俺は……ポケモンになつちまつたんだ？）

しばらく考えてみたが、やはり何も分からなかつた。コウキも欠伸をして、寝返りを打つ。

（まあ、分かんねえものは今考えたつて同じだしな……とりあえず、明日もあることだし寝るとするか）

やがて、コウキも規則的な寝息を立て始める。

じつして、初めてのギルドの夜は更けていった。

第3話 探検隊“カノープス”結成！（後書き）

カノンの台詞が書いていて少々恥ずかしくなりました

カノン「凜月、何か言つたあ？」

いえ何も（二コリ）

コウキ「宿題終わってないのにいいのかそんなことしてて」

……、シユーマイが食べたいなあっ！（汗）

第4話 記念すべき初依頼（前書き）

なんか長くなってしまった……

では、どうや

翌朝。

(なんか身体が重いような風邪でも引いたか?)

なぜか朝早く目が覚めたユウキは、寝ぼけつつそんなことを思つ。外から鳥ポケモンたちのさえずる平和な鳴き声が聞こえてきて、朝であることを認識する。

と、次の瞬間。

ギルドの弟子の一匹、ドームのモーニングホールである。ヒ、それが直撃したコウキの、ドームに漏らない音量の断末魔が響き渡った。

余談だが、ユウキは耳がかなり良い方だ。

「……今まで自分の耳の良さを恨んだのは初めてだ……って、あ？」

「…………寝てる（だと）……」

やう、カノンは、ゲームのホールディングホールとコウキの断末魔を全くの無防備状態で食らったにも関わらず、まだ幸せそうな顔で眠っていたのだ。さらに不幸なことに、カノンの下にあるものはひとつ。

「…………」

お察しの通り、困り果てた顔のコウキであった。

「俺は長じてギルドでの役をやつて居るが、……俺並みの音量で断末魔を上げる弟子も、それをまともに食らっても起きない弟子も、初めて見たぞ」

ドゲームが呆れたよつて嘆息した。

「…………電撃つてどうのか分かんねーし、そもそもいつ効くか分からんしな…………でもやつてみつこう」

「…………」

「これだな」

カノンの足の裏と耳の裏を高速でくすぐり始めた。

「…………ひつ、ひつ、ふひや……ひやせひひやひやああああ……ひああああああああ……」

すると、予想以上に効果はあつたらしくカノンは変な悲鳴を上げ、ばたばたと身体をよじつて暴れ始めた。ユウキがくすぐるのを止めると、

「ふいっ……ふひゃあああ……。あ、ユウキ……おはよー」

「おはよー、じゃねえ……つておじドゲームー。ペラップが朝は早いとか言つてたが大丈夫なのか!?!?」

「うおおっ! 大丈夫じゃねえ! やべえ、親方様のアレを食いつ羽田になるぞ! 急げ!」

まだ寝惚けているカノンを遠慮無く引きずり、ユウキは全力でドゲームを追いかけた。

「遅いぞ! 新入り! ドゲーム!」

やつぱりペラップに怒られてしまつた。毎朝辛いなあ、とユウキは肩を落とす。

「さて、全員集まつたようだな。よろしく ではこれから朝礼を行つ。親方様、全員揃いました」

ペラップがプクリンの部屋に声をかけると、しばらくしてプクリンが出てきた。だが、なぜかユウキはその姿に違和感を覚えた。

「では親方様 一言お願いします」

ちなみに、まだふらつこっているカノンはコウキに寄りかかって居眠りをしている。

皆の注目がプクリンに集まる。が、なぜかプクリンは何も言わない。

(……まさか、『マイシ』)

「…………ぐうべり…………。

「ぐうべり…………ぐうべり…………」

(やつぱりかーつー やつぱり寝てたかーつー やつさつきの違和感の正体はこれかーつー ていうか何なんだこの人ーつー^{ポケモン}…)

コウキは内心叫びまくっていた。が、顔には出さないでおく大人なコウキである。

ふと見ると、弟子たちが何か小声で喋っている。耳をそばだてる
と、こんな会話が聞こえてきた。

「(…………プクリン親方つて相変わらず凄いよな…………)」

「(ああ……ああやつて起きてるよつて見えて、実は目を開けたま
ま寝てるんだもんな…………)」

「(…………まあ、俺は今朝、それに匹敵する凄さを持った奴を見たが
な…………)」

最後の台詞は敢えて無視するコウキだった。

「ありがたいお言葉、ありがとついでござました 」

ペラップが、さもブクリンが何か言つたよつて無理矢理終わらせ
る。

「 ああ皆 親方様の忠告を肝に銘じるんだよ 最後に 朝の
誓いの言葉、はじめ 」

「ひと一つ 仕事は絶対サボらない 」

「ウキが戸惑つていると、カノンがようやく田を見ました。寝ぼ
け眼で辺りをきょきょく見回し、よつやく自分がおかれている状
況を理解して、

「……むぐつ」

危うく叫びかけたのを、ウキに口を塞がれ回避した。

「みつつい 皆笑顔で明るいギルドー 」

「 ああ皆 仕事にかかるよ 」

「おお―――――――――――― 」

ウキが寝ぼけカノンと必死の攻防（？）を繰り返していくうち
に朝礼は終わり、弟子たちは各自散つていく。何とかカノンを完全
に起こすことに成功し、ウキが胸を撫で下ろしていると、ペラッ
プが近寄ってきた。

「おー、そんな所でぼーっと突つ立つてているんじゃない。オマエた

ちはーじちだ ついてきなさい 「

ペラップを追つて地下一階へ上ると、来たときはよく見なかつたが、大きな掲示板が一つあつた。ユウキたちは左側の掲示板へ案内される。

「オマエたちは初心者だからな まずはこいつらの仕事をやつもらおう。これは掲示板。各地のポケモンたちの色々な依頼がここに集まつてるんだ。依頼の種類も色々あるぞ」

掲示板には沢山の紙が乱雑に画鋲で止められており、一枚ずつに依頼が書かれているようだ。

「こんなに沢山依頼が来るのか……」

「最近、悪いポケモンが増えてるのは知つてるか?」

「悪い……ポケモン?」

「ユウキが訊くと、カノンは頷いて言つた。

「そりやう。ボクも聞いた話なんだけど、何でも時が狂い始めた影響で、悪いポケモンも増えてるんでしょ?」

「時つて…時間のことか? それが狂つて……悪いポケモンが増え る? どういふことなんだ?」

「それに関してはワタシも分からぬがな。とにかく、そのせいで掲示板の依頼が増えているんだよ。あと、これは時の影響なのか分からぬんだが、最近各地に広がつてきているのが……不思議のダ

ンジヨンだ

「不思議のダンジョンって、入るたびに地形や落ちてている道具が変わるダンジョンのことでしょ？ 途中で力尽きちゃうとダンジョンの外に戻されて、持ったお金が無くなるし、道具も半分ぐらい無くなることもあるっていう…本当に不思議な場所なんだけどね。でも行くたびに新しい発見があるから、探検にはもってこいの場所なんだよ！」

カノンは目を輝かせながら力説する。正直、ユウキには半分理解できたかできないかぐらいだった。

「なんだ よく知ってるじゃないか それなら話は早い。依頼の場所は全て不思議のダンジョンだからな。それじゃあ…どうしうかな」

ペラップは掲示板に貼られた紙をペラペラとめくつ、その中から一枚を抜き取つた。

「これがいいだろ？ ホレ

カノンはその紙をペラップから受け取ると、音読し始めた。

「えーと…

はじめてして。

私、バネブーと申します。

ある日、私の頭の真珠が悪者に盗まれてしまつたのです。

その後の情報によると、『湿った岩場』といつダンジョンの奥に捨てられていたらしいのですが…

その岩場は危険な所らしく、私一人ではそんな所怖くて行けません！
ですので探検隊の皆様、私の真珠を取つてきてくれないでしょ
うか？

お願いします！！

……だそうだよ

「ふむ。……そんじゃ行くか、その“湿つた岩場”つつじの所に」

「うん！ 初めての依頼だもん、頑張ろうねっ……！」

「……意気込みは素晴らしいのだが、まず跳ねるのを止める。落ち
着け。はい、深呼吸ー」

「すうー、はーー、すうー、はーー……」

「落ち着いたか？」

「うん！ 落ち着いたよつ

「全く落ち着いてねえぞコイツ……」

「ウキの頭の中に、また一つ重大な懸案事項が増えた。

第5話 グレアーズ参上！？（前書き）

今回かなり急いでたのでグダグダです。orz

ユウキ「いつものことだろ」

「うわ、酷……」

ユウキ「それでは本命どうぞ」

第5話 グレアーズ参上！？

「コウキー、早く行け！」

カノンが無邪気に叫んで、走り出した。コウキも慌てて追いかけ
る。

どんづ。

コウキの前方から、何かが衝突したような音が聞こえた。前を見
ると、アーボック、ノクタス、クチートの三匹がカノンを取り囲ん
でいるのが見えた。リーダー格らしきアーボックが何か喚いている。

「てめえ何様だ？ 僕様にぶつかつておいて、すみませんの一言も
ねえのか？」

「ひつ……」

カノンは怯えてしまったのか、何も言えないようだ。コウキはゆ
っくりと近寄つていき、カノンに詰め寄ることに夢中になつて三
匹に声をかける。

「よつチンピラだも。てめえらつてか、女の子相手に1・3までし
ないと勝てねえのか？ 隨分と弱っちいチンピラだな」

案の定挑発は効果抜群だつたらしく、三匹は一斉にコウキの方を
向いた。

「ああん？ そつちいを言つてくれんじゃねえか。なんならいいで

戦つてもいいんだぜ?」

アーボックはユウキを格下と踏んだのか、余裕たっぷりの表情で攻撃態勢をとる。その通り、戦い方すら知らないし、攻撃を食らえばすぐに倒れてしまう格下なのだが。

「いや、俺らはちゃんとこなすべき依頼があるからな。暇人じゃねえんだよ」

「貴様、それだけ言つといて逃げる気か?」

「まあ、そう取つてくれやがつてもいいさ。ただし一つ言つておくぜ」

「……何だ?」

「俺を舐めんなよ? そんじゃあな。依頼人が待つてつからよ。力ノン、行くぞ」

「……う、うん」

ユウキはやや呆然とした表情のアーボックの答えを待たず、カノンを連れて走り出した。

「ふえええ……。怖かったよう、ユウキ~」
三匹が見えなくなつてから、カノンはいきなりユウキに抱きついた。ユウキはバランスを崩しかけ、よろめく。

「うわっ……驚かせるなよ、全く」

「ありがとお……『ウキがいなかつたら、ボク今頃あの**ポケモン**人たちに殺されてたよお」

「あーあー。そのへタレ具合、何とかしりよ。……そして、カノン。非つひつひ常に言いくといのだが」

「何?」

「思いつきり喧嘩売つちまつたはいいものの、あいつらゴールドワントクだつたわ……すまん」

それからは特にトラブルも無く、一辺は湿つた岩場の入り口に到着した。その名の通り、空気がじめじめしていて、大きな岩がごろごろ転がっている。正面に見える一つの岩が重なる所にぼっかりと裂け目が空いており、探検隊の誰かが作ったのか、近くの木製の看板に“湿つた岩場”と書かれていた。

「お、着いた着いた」

「よーし行くぞー！」

叫んで、カノンが岩の裂け目に飛び込む。……が、お約束なのか、カノンは周りの岩に侵入を拒まれて勢いよく吹っ飛んだ。

「こつたあ……」

「いつたあじやねーよ、不死身かお前は」

「フフフフフ……バレてしまったのなら仕方あるまい。何を隠そつ、ボクは不死身なのだ」

「……これでもか」

すかさずコウキは転がっているカノンの足の裏をくすぐる。

「みつ……みきやああああああああ……すぴ、すみません、嘘つき、まひたああああ……」

「まひ、漫才やってないで行くぞ」

「いやー！ ボクを置いてかないでーー！」

もはや恒例の如く、コウキはカノンをすくねると正きゅうて姫の裂け目に侵入するのであった。

「体当たり”！」

カノンはいつものヘタレ具合とは裏腹に、案外強いことが判明した。今も、野生のカラナクシを体当たり一撃で倒していた。

「意外と強いんだな、お前」

「うーん、探検隊になりたかったからいつも訓練とかしてたんだよ

ねー」

「成程。ちょっと見直し 」

「最初は怖くて木に“体当たり”すら出来なかつたんだけどね」

「言わなきやバレないことわざわざ言つたなー。見直しかけたけど今
ので何も言えなくなつたからー。」

相変わらずどこか抜けているらしいカノンに突つ込みを入れつつ、
コウキも負けじと襲いかかつてくる野生のポケモンたちをさつき掴
得したばかりの電気ショックで倒していく。

「順調だな」

「うん。」そのまま行つちやおうー。」

「……いい加減、その異常なテンションはぜりつにかならないのか?」

「大分奥まで来たね……」

「ああ、そうだな……バネブーの真珠、あるか?」

「つーん……あつー。あれじゃない? ちょっと待つてて」

カノンは苔の生えた岩の陰から何かを見つけ出し、またコウキの
所へ戻ってきた。わずかに息を弾ませたカノンは、ピンク色に淡く
輝く、綺麗な球の形をした石を持っていた。

「成程、多分これだな」

「やつたあ！ ユウキ、初依頼は大成功だよ」

「そうだな！ そんじゃあ、帰るとするか

ユウキとカノンはハイタッチを交わすと、バッジのテレポート機能で、ギルドへ帰つていった。実はバッジを忘れたカノンが、真珠を持つているためと称してユウキにバッジを使わせたのはまた別の話。

「ありがとうございます、カノーパスさん！ もう私、これが無いと落ち着けなくて……ずっと家の中を跳ね回つていたんです！ もう、何と言つてお礼をしたらいいか……」

田を潤ませながら、バネブーの身体には、沢山の絆創膏や湿布が貼られていた。

「あ、あと、これはお礼の品々です！ どうぞ受け取つてください！」

バネブーはユウキに、グリルやタウソンなど、さまざまな道具を手渡した。

「え！？ いいのこんなに！？」

カノンが驚いてバネブーを見た。だが彼は、カノンにもう一つ袋を渡す。中身を見たカノンは、危うく卒倒しかけた。

「「、「2000ポケ！？」嘘！？」

「なんのなんの。真珠に比べれば安いものですよ。本当にありがとうございます」

「バネブーが去つていくと、カノンはいきなり興奮して飛び跳ねながら言つた。

「ねえ凄いよコウキ！ 2000ポケだつて！ ボクたちいきなり大金持ちだよ！？」

「コウキが若干気圧われつゝも「あ、ああ…」とか答えていふと、ペラップがやつてきた。

「オマエたち、よくやつたな だが、お金は預かっておくよ」

「「え！？」」

「ほんとは親方様の取り分だよ エーと… オマエたちはいねぐらいかな」

ペラップが袋から出して、カノンに渡した金額は。

「「、「200ポケ……」」

「一気に減らされたな、おい……」

「「これがギルドのしきたりなんだよ。我慢しな」

「うー……」

カノンが耳とシップを力無く垂らす。その時、食堂からチリーンの声が聞こえてきた。

「みんなーん 食事の準備が出来ましたよー」

するとカノンはいきなり耳とシップを立てて、「うはん うはん」と謎の歌を歌いながら食堂に走つていった。一人取り残されたユウキは、溜息混じりに呟く。

「単純な奴だ……」

晩御飯の後、ユウキとカノンはギルドの弟子の一人、キマワリに呼び止められた。

「きやーー 新入りの子はかわいいですわーー きやーー！」

一人でテンションが高くなつているキマワリに、ユウキは少し気になつていることを訊いた。

「あのー、すいません。この辺に、アーボックとノクタスとクチートのチームつてありますか？」

ユウキの質問に、カノンはわずかに身体を強張らせた。キマワリは一皿思案顔になつたが、やがて思い出したように呟く。

「敬語はいらないですよ。えーとそれで、アーボックとノクタス

とクチート…？ あ、ああ。確かに、グレアーズつていう探検隊がいたはずですわ。でも、それがどうかしましたの？」

「いや、別に…ちょっとした噂を聞いただけで…いや、聞いただけだ」

「それならいいですわ。じゃあ、お休みですわーー！」

「お休み、キマワリー！」

カノンが元気に返すと、キマワリは自分の弟子部屋へ入つていつた。一匹も自分たちの弟子部屋へ入り、藁のベッドに潜り込む。

「「ウキー、まだ起きてる？」

「何だ？」

「初めての依頼が上手くいってよかつたよね…。まあ、ポケをブクリンにほとんど持つてかれちやつたのは悔しかつたけど。でもこれも修行なんだもんね……ふあああ

「今日は本当に忙しかつたもんな。カノンももう眠いだろ」

「うふ…ふああ

「じゃあ早く寝るといひやせ。明日は俺の上に乗つて気持ちよれがに寝てんじやねーぞ……」

「はーー……お休みー」

「…じや」

そんなやり取りを交わして、私は黙りこなした。

第5話 グレアーズ参上！？（後書き）

カノン「グレアーズといつ名称はどこから？」
響き。

ユウキ「適当ぢだ。といつ訳で電気ショックの刑」

れやーーーつ（断末魔

第6話 ルリリの叫び（前書き）

カノン「念のため。今回のサブタイトルは、ルリリの叫びであつて
凜月の叫びではありません」

ユウキ「そしてテスト終わったの29日だつたはずなのにかなり経つてないか?」

うぐつばれたか。だつて今回の長かつたし

コウキ「まあいい。この間に読者さんのがいなくなつてないことを願つておけ」

大丈夫それに関してはテスト期間中もずっと祈つてた(笑)

カノン「……。とりあえず、本編行こうか」

「ウキ「だな。では、エイム」

ユウキは耳の痛さを堪えつつ、お約束通り自分の上に乗つかつていたカノンの足の裏をくすぐる。

「早く起きて。そして俺の工場から出すぐつたいようじゃねえよ。早く起きろ。そして俺の工場から出

ପାତା ୮

カノンは部屋の隅まで勢いよく転がつていった。そして背中を壁に激しく強打した。

「アーティストのアーティスティックなアーティスティズム」

「馬鹿でも何でもいいから起せろー」

傍らで固まつたまま呆れているドゴームを敢えて放置し、ユウキはいつも通り暴れるカノンをいつも通り引きずつてゆく。

「みつっー！ みんな笑顔で明るいギルドーー！」

「 まあまあ 仕事にかかるよつ

「我說——」

背中を強打したせいではつちりくつきりすつきり目が覚めたのか、カノンはしつかりした足取りでペラップの元へ向かっていく。

「ペラッパー、今田の仕事はー?」

おお 朝から氣合が入っていい加減らしい。ついでぎなさい

ペラツアは梯子を登つていき、今度は前の依頼とは別の掲示板の前で止まつた。

「あれ？」昨日はあつちの掲示板じやなかつたつけ？」

「そうだ。あいつのとは少しばかり違うんだよ」

ペラッパは昨日依頼を受けた掲示板をカ�퍼フルな翼で示した。

「あっちの掲示板には、ダンジョンの中で倒れたポケモンの救助だとか、ダンジョン内での一般人の護衛だとか、そういう依頼が来るんだよ。で、こっちの掲示板はだな……」

ペラッピは一瞬にやりと笑つたような顔になり、言葉を切つた。
そして、カノンの耳元で囁く。

「……お尋ね者だ」

「ひつ……」

カノンの顔からさあつと血の氣が引いていく。

「だからこいつらには賞金が懸けられてるんだがな……凶悪なポケモンが多いんだよ」

「ええつ……!? 無理だよう、そんなのボクたちに捕まえろつて! ?」

「……ハハハハッ 「冗談だよ、冗談 世紀の極悪ボケモン人もいれば、
ちょっとした口 sond 口もいるつて感じで本当にピンキリだよ まあ、この中から弱そうな奴を選んで捕まえてくれ」

「「ウキ……ペラップがボクのこといじめてくるー……」

「お前はちつちつ子か。……で、ペラップ。弱そうな奴とはいえ、準備しなくていいのか? 相手は死に物狂いだから、さすがに無防備じやまずいだろ」

「それもそうだな。誰かに施設を案内させるか。おーい! ビッパ! ビッパ! ?」

しばらくすると、息を切らせたビッパが走ってきた。

「はあはあはあ……。お呼びでしょうか」

「「マイシラの」とはもう知ってるよな 最近入った新入りだ。」

「いらっしゃりにトレジャータウンを案内してやつてくれ」

「はいっ！ 了解でゲス！」

「オマハビッパの言ひことをよく聞いて行動するんだぞ。じゃあな」

ペラッピは上機嫌そうに去つていく。

ユウキがさて案内してもらうかとビッパの方を見ると、ビッパはなぜかフルプルと小刻みに震えながら田に涙を浮かべていた。

「ど……どうしたの？」

カノンが問い合わせる。

「ううう……後輩が出来たんで感動してるでゲス……。キミたちが来る前は自分が一番の新入りだったでゲスよ……ぐすんつ……つて、こうしちゃいられないでゲスね。案内するでゲス。ついてくるでゲスよ」

トレジャータウンに向かう途中、ユウキはビッパに一つ気になつていることを訊いた。

「おいビッパ、そういうえばあのグレッグルつて、何やつてんだ？」

「実は何をやつてるのか、あつしにも分からんんでゲス。ただいつも後ろの壺をいじつてるみたいなんでゲスが……」

そういえばグレッグルは、確かにさっきも自分の後ろにある怪しげな壺に半分頭を突っ込むようにして何かをしていた。

「なんか怪しい人だよね……^{ポケモン}」

カノンが呟いた。

「さあ着いたでゲス。ここがトレジャータウンでゲスよ」

「ああ、トレジャータウンのことならボクも分かるよ。えーっとね、あれがヨマワル銀行。で、あっちがエレキブル連結店……だけど、今日はエレキブルさんいないみたいだね」

カノンが前足で次々と店を示しながら説明していく。

「あそこはカクレオン商店。その隣がガルーラの倉庫だよね」

「随分詳しいでゲスね。それなら安心でゲス」

ビックパが感心したように呟く。

「じゃああつしは先にギルドに戻つてるでゲス。準備が終わつたら地下一階に来るでゲスよ。そしたらあつしもお尋ね者を選ぶの手伝うでゲス」

「ありがとう！ ビックパって優しいね」

「そ、そんなあ……」

ビッパは赤面して少しうるたえるが、気を取り直してギルドへと戻つていった。

そしてユウキとカノンはガルーラの倉庫で余分な道具を預けたり、トレジャータウンにいる先輩探検隊と喋つたりした後、カクレオン商店に寄つた。

店主のカクレオン兄弟は話好きなのか、カノンと世間話に花を咲かせている。

少し手持ち無沙汰気味になつてしまつたユウキがふと横を見ると、一匹のポケモンが走つてくるといひだつた。

「カクレオンさん！」

「ん？ おお～！ マリルちゃんとルリリちゃん！ いらっしゃい

」

「えつと、リンクゴーダさい！」

カクレオンは慣れた手つきでリンクゴを袋に詰め、一匹に手渡した。マリルが代金をカクレオンに渡し、去つていぐ。

「あの一匹は兄妹で、お母さんの具合が悪いのでああやつていつも使いに来てるんですよ。ホントに偉いですよね～」

「へえ……まだちっちゃいのに偉いね～」

カノンが感嘆の声を上げた。内心ユウキはお前がちっちやいとか言えるのかと突つ込んだが、しっかり喉元でストップである。

「カクレオンさん！！」

「あれ？」

その声に因匹が振り向くと、マリルたちがまた戻ってきていた。

「どうしたの？」

「リンク」が一つ多いです！」

「ああ、それはワタシからのおまけだよ。仲良く分けて食べるんだよ」

「ホントですか！？」

「わーい！ ありがとうカクレオンさん！」

ルリリが跳ねて喜んだ。

「いやいや。気をつけて帰るんだよ」

「はーい。や、ルリリ。帰る」

「うんー。」

走り出すマリルたち。が、ルリリが転んでしまい、袋からこくつかリンクが転がり出す。

「大丈夫か？」

「ユウキが足元に転がってきた一つを拾い上げてルリリに手渡すと、ルリリはぺこりとお辞儀をしてそれを受け取った。

「ありがとうございます」

そして他のリンクを拾い集めて袋に入れ、もう一度お辞儀をして去つていった、その時。

（うう……？）

突然ユウキは、得体の知れない立ちくらみに襲われた。あまりの不快感に倒れそうになるが、なんとか踏みどまる。

そして、次の瞬間。

目の前を閃光が走り抜け、声が聞こえた。それも、助けを求める声が。だがそれも一瞬後には消え去り、カノンとカクレオンたちは何事も無かつたかのように談笑している。

「おい……カノン、今何か聞こえなかつたか？」

「どしたのユウキ？ ボクは何も聞こえてないけど……カクレオンは？」

「いや、ワタシは何も」

「ワタシもですね」

だが、確かに聞こえたのだ。助けを求める声、しかも聞いたこと

のある声だ。しかしそんなユウキの様子にも気づかず、カノンは笑つて言つ。

「ユウキだいじょぶ？ 寝不足は身体によくなによ？ 今日からちやんと寝な？」

「いやカノン。もしも俺が寝不足なら、それは間違いなく九割方お前のせいだと叫つてい。断言する」

「乙女捕まえて言つた罰じやないよそれ！」

「じゃあ質問だ。ドゲームのモーニングコール食いつて起きなかつたのはどこの誰だったかな？ 俺なんてあれでドゲームと同レベルの断末魔上げたんだからな」

「うぐ。ちやんと今日から起きるよ。……多少は」

「なんだその多少はつて」

「い、いやあの……その、何か聞こえたといつのは？」

既に脱線し始めたカノープス列車を、カクレオンが慌てて正規ルートの線路に押し戻す。

「ああ……それなんだが、さつき助けを求める声が聞こえた気がしてな……」

「助けを求める声？ だからそんなの聞こえないって。ユウキは嘘吐ぐの下手だねー。や、やうそ行くなきや。ビッパが待ってるよ」

「ウキは至つて真剣なのだが、カノンはそれをあつせりと笑い飛ばす。そして、ウキの手を引つ張つてずんずん前へ進んでいった。

川によつて分けられた二つのトレジャー・タウンを繋ぐ橋を渡つたところで、カノンがいきなり立ち止まつて声を上げた。

そこにいたのは、わつきの幼い兄妹たちと、黄色いバクのようなポケモンのスリープだつた。

「あれ？ マリルちゃんとルリリちゃん。どうしたの？」

「あ、カノンさん！ ボクたち、前に無くした物があつて……。それで、そのことをたまたまスリープさんに言つたら、場所を知つてるかもしれないから一緒に探してあげる、つて言つてくれたんですね！」

「そうなんだ。見つかるといいね！」

だが、ウキはなぜかこのポケモンに違和感といつた、心の中の妙な引っかかりのようなものを感じていた。分かりそうで分からぬ、届きそうで届かない位置にそれがあるせいで、そのうちにその引っかかりは心の端から転げ落ちてしまい、闇に埋もれてしまう。

「じゃあ、カノンさんたちも頑張つてくださいね。さよなら！」

すれ違つたままに声をかけられ、ウキはほとんど反射的に「あ、ああ」と言つながら手を振り返した。

ぱしつ。

「おっと、失礼」

ぼうっとしていたせいでの手が後から行ったスリープに当たってしまったようだった。謝ろうかとも思つたが、既に自分の視界にいなかつたので断念することにした。

と、その時。

再びあの不快感がユウキを襲つた。ほほ反射的に閉じた瞼の裏に再び閃光が走り抜ける。だが前回とは違つて、今回はかなりくつきりした映像がユウキの脳裏に映し出されていた。

青色の小さなポケモン。それと向かい合つ後ろ向きの黄色いポケモン。そして、青いポケモンの叫び声。

おじカノン、と言おうとして、一步先に言われてしまった。

「ユウキどうしたの？ さつきからぼーっとしてて。普段より突つ込みもしくは辛辣な言葉のキレもよくないし……まあ、とりあえずギルドに帰る？」

結局言つ機会を失つたユウキは、颯爽とギルドに向かうカノンにとりあえずついていくしかなかつた。

第6話 ルリツの叫び（後書き）

カノン「ねえ凜月。前書きからの続きだけど、次は文化祭じゃないの？ そして、完結していない長編小説、しかもまだラストバトル書いてないやつ、〆切明日だよね？」

う……。

ユウキ「そしてそれを催促する文芸部部長さんもこれを一応読んでくれてるんだよな？」

ううう……。

カノン「さっきそれ書いてたのにいつの間にかこいつち來たしね」

ぐはあつ（死

ユウキ「あれ、死んだぞ」

だ、大丈夫！ ちゃんと書くから！

ユウキ「凜月の大丈夫程アテにならん物はねえよ

カノン「せいぜい部長さんに怒られてなさい。じゃあ字数もアレなのでこの辺で」

ユウキ「さよなら」

カノン「さよなら」

あ、あとうなみに今後の展開（？）についても活報に書きましたのでよろしくです。——

第7話 トゲトゲ山（前書き）

カノン「何日空けた?」

13日……（泣）

ユウキ「しかもサブタイが明らかに手抜き」

「みんなさ」「みんなさ」「許して」「コソリしないでえええ

あ、あと今回ギャグ要素がほとんど無いです

カノン「ではどうや?」

第7話 トゲトゲ山

「ビッパ～！ 終わったよ～！」

「お、それじゃあお尋ね者を選ぶでゲスよ

若干腰が引けているカノンがビッパと共にお尋ね者を選んでいる中、ユウキはさつきの映像をぼんやりと思い出していた。黄色いポケモン……あれば誰なんだろうか。

「情報を更新します！ 危ないので下がってください～！」

「わっ～！」

突然掲示板の奥から響いてきた声に、カノンは吃驚して飛び退いた。と同時に、掲示板がばこんという音を立てて裏返しになる。カノンは本能的に立った耳とシッポをぴくぴくさせながら、ビッパに尋ねた。

「ねえビッパ、今の何？」

「あれば掲示板の情報の入れ替えでゲス。ダグトリオがいつもああやつて、掲示板の情報を新しいものに書き換えてるんでゲスよ」

「ふうん……」

「更新終了！ 危ないので下がってください～！」

威勢の良いダグトリオの声が再び響いた。その声で現実に引き戻

されたユウキは、次の瞬間とんでもないものを目にすることになる。

『お尋ね者 スリープ』

間違いない。あの黄色いポケモンだ。

「カノン！」

「ひやいつ！？」

ユウキの鋭い声に、カノンが飛び上がつて間抜けな声を出した。

「とりあえず来い！」 説明は後でする。」

「えつ！？ ちよ、ムウキ！？」

カノンの首根っこを掴むと、コウキはギルドの壁に突っ込まんばかりの勢いで走っていく。後には、惚けた顔をしたビッパだけがぽつんと一人残された。

「え?
どうしたんでゲス?
ど、どこ行くでゲスかあ～!?

「はあ、はあ……あれ？」マリルビアのたった一言。

「あつ！ カノンさん、ユウキさんつ！ る、ルリリが、ルリリがいなくなつちやつたんですね！」

「スリープと一緒に、か？」

「そう！ そうなんです！ 気付いたらこの間とか……」

「どちらへ消えてったか分かるか？」

「はい。いや、どちらです？」

「ルリリが誘拐されたあ！？」

「お前見なかつたのか、さつき掲示板にあつたんだよ。アイシはお尋ね者だ」

「お、お尋ね者！？」

「ぬ、ルリリが！？」

走り出すとしたマリルを、コウキがもや強引に引き止める。

「危ないからお前はここ待つてろ。ルリリは必ず俺たちが連れ戻してくれるから」

マリルに案内されて着いたそこは、コウキが見た映像とどこか似ていた。不思議な地図を広げて見てみると、「トゲトゲ山」と記されている。

「カノン。ルリリはこの辺のどこかにいるさだ」

「え……？ 何で分かるの？」

「細かいことは後だ。とりあえず今はルリリの身が危ない」

「う、うん……分かった」

山の中は、ゴツゴツした岩が沢山転がっていた。走つたりするとすぐに転びそうになるので、注意深く進んでいく。また山だから、全体的に虫タイプ、毒タイプ、飛行タイプ、岩タイプなどのポケモンが多い。

「“体当たり”！」

「“電気ショック”！」

最初こそ順調に襲いかかるポケモンたちを倒していくものの、やはり疲れが溜まってくる。注意力も落ちてきたので、ユウキがそろそろ休憩を取らうかと考えていた時だった。

「痛つ！」

カノンが足元の石に躊躇って転んでしまった。

「おい、大丈夫か？」

「いたいたた……まあ大丈夫だよ。ありがと」

「やっぱり休憩した方が……え？ カノン、足元！」

「えつー!?

訳も分からぬままカノンは跳躍し、半分ユウキに飛びつく形での場から離れた、次の瞬間。

ズボツ! といつ音と共に、カノンが躊躇した石が地面から抜けた。

「い、イシツブテ、……」

間一髪で助かったカノンが呆然としていると、上から声が降ってきた。

「……とつあえず、離れる。お前は何回俺の上に乗れば気が済むんだ」

自分を何とか抱きとめたユウキの声だと分かつて、ぼんやりしたままユウキから離れる。

どん。

「……ふえ?」

後ろを振り返ると、そこには安眠を妨害されて怒ったイトマルがいた。

「逃げ……るのはきついな……。カノン、戻つてこい」

「……。はうつ」

あまりの非常事態に抜けかけたカノンの魂を戻し、ユウキはイシ

ツブテとイトマルに向き直る。

「“電氣ショック”！」

ユウキはまず先に襲いかかってきたイシツブテに電氣ショックを放つた。が、確かに技は当たったはずなのに、イシツブテはあまりダメージを受けていないようで、構わずユウキに向かって突進していく。

「な……」

「“体当たり”……っ！」

だが、為す術の無かつたユウキとイシツブテの間に割つて入った影があつた。

「カノン……！」

「ユウキ、地面タイプの相手に電氣タイプの技はほとんど効かないんだよ。イシツブテはボクが倒すから、ユウキはイトマルをお願い！」

そう言つと、カノンはイシツブテに向き直つて突進した。だが、イシツブテはひたすらに逃げ回るだけで、何も仕掛けて来なかつた。だが力を溜めながらそれを追いかけるカノンは、イシツブテよりも早く疲弊していく。

（こままじや疲れるだけ……だけど……あつ！）

何かを思いついたカノンは、トレジャーバッグから取り出した“それ”を自らの口に放り込んだ。

「“電光石火”！」

次の瞬間、イシツブテが目を回して倒れていた。

先ほどカノンが食べたのは、食べたポケモンの素早さを飛躍的に上げる種“俊足の種”だ。その素早さのままイシツブテに追いついて“体当たり”することで、威力は劣るが目にも止まらぬ速さで相手にダメージを与えることが出来る。さらに、イーブイの特性“適応力”。自分と技のタイプが一致していれば威力が通常よりも高くなるという効果を持ち、威力の低い“電光石火”でも致命傷を与えることが出来たのだ。

一方、ユウキはそこまで苦戦を強いられてはいなかつたが、ここに来るまでに電撃を使いすぎたせいか、技の威力が落ちていた。そして実はユウキは物理攻撃が得意ではないため、今まで電撃に頼りすぎている所があり、ろくに攻撃も出来ない状態に陥つてしまつている。

「“電気ショック”」

その時、一発の電撃がイトマルに直撃した。だが威力が弱く、致命傷には至らない。ユウキは身構えるが、何故かいつまでも次の攻撃が来なかつた。

「あ……？」

よく見ると、イトマルの周りには弱い電気が弾けていた。イトマルはそれを振り払おうとするように身体を震わせるが、思うように

身体が動かないよつだ。

「麻痺……してるのか？」

今ならば、イトマルは思うよつに動けない。つまり、物理攻撃が苦手なコウキでも、ダメージを受けずに物理攻撃をすることが可能となる。

「よつ……“体当たり”つー。」

為す術も無く、イトマルは田を回して倒れた。

「大丈夫だつた？」

「ああ……何とかな。とつあえず疲れたし、一旦休憩しよう」

「うん……ボクも疲れた」

「田はポケモンでないことを確認してから大きな岩の上に座り、トレジャーバッグからオレンの実とコンドウを取り出して齧る。

「もうちよつと俺も特訓しなきやな……いつまでも電撃ばっかりに頼つちやこられないし」

「そだね。今度特訓しようか」

「だな……」

しばらく休んだ後、田は再び頂上へ向けて歩き出した。

第7話 トゲトゲ山（後書き）

カノン「……なんて あら あらな」

誠にすいませんでした。戦闘描写とか書くと本当に自分の文章力の無さを思い知らされるなあ……

ユウキ「駄目人間？」

がふうひ…… ゆ、ユウキさん…… それは禁句……

カノン「やれやれ。」(つや駄目だ。ちゃんと研究するべし)

精進します！ そしてスリープ戦は次話で

あと文化祭終わりました。打ち上げも代休返上してディズニーランド行つてきました

ユウキ「じゃあこれから更新早くなるんだな？ なるんだよな？」

の…… ノーノメントでつー（汗

ユウキ「はああ……」

第8話 スリープ戦（前書き）

ユウキ「…………（バチバチバチ）」

カノン「ゲームするのに忙しかったんだよね」

そう！ そうなんですよ、ポケダンの伝ポケと活躍の跡をコンプしました！ リセットしてから約4ヶ月。

カノン「ボロ出したね？（に）」

コウキ「では、本編どうぞ……（滲息）」

第8話 スリープ戦

「ふう……「ウキ、」ここって頂上かな……？」

「らしいな……あつ！ おい、あれ！ ルリリとスリープじゃねえか！？」

「本當だ……」

「呪はとつあえず岩陰に身を隠し、様子を窺う。

「呪つことを聞けば返してやるつて呪つててるだらうがー。」

「嫌……あ……お兄ちやあんつ……。」

ルリリは叫んで逃げ出さうとするが、スリープに遮られてしまう。そしてスリープの怒りが沸点を超えたのか、スリープは拳を振り上げてルリリに迫った。

「呪つことを聞かないと……痛い目に呪わせるぞつーーー！」

「た……助けてーーー！」

間違ひ無い。あの時聞こえた声だ。

「分かつてゐや！」

「分かつてゐや！」

微かに顫き、コウキとカノンは同時に岩陰から飛び出した。

「待て！ お尋ね者のスリープ！」

「うう！？ 何故ここが…？」

「ボクたちは探検隊“カノープス”！ お前を逮捕しにきたんだ！」

「なつ……ー？」

緊迫した雰囲気が流れる中、ふとスリープが何かに気づいた。

「あれ……お前、もしかして……震えてるのか？」

「うう……」

「……カノン？」

ルリリを含め、三人の視線がカノンに集まつた。

「はつ。お前ら、探検隊とはいえまだ新米か。俺様もそんな新米なんかに捕まる訳にはいかないなあ……っ！」

「てめえっ……！」

コウキがスリープに向かって一直線に駆け出した。だが、カノンは動かない。緊張と不安で硬直してしまつて動けないので。

「“電気ショック”！」

ユウキがスリープ目がけて電撃を放つ。しかしスリープは、それをいとも容易く躲してしまった。

「なつ？」

「はんつ」

スリープは驚きを隠せないユウキを鼻で笑うと、懇切丁寧に説明した。

「俺の特性は“予知夢”。お前の攻撃なんてどこから来るか分かるんだよ」

ユウキは舌打ちすると、今度は走りながら電撃を繰り出す。だがそれも、スリープは少し首を傾けるだけで躲してしまった。

さらに、そのユウキの背後からスリープが襲いかかる。ユウキは首をひねってスリープの姿を認識したが、回避できない。相当のダメージをユウキが覚悟した、その時

ユウキがスリープに躊躇なく突っ込んでいったにも関わらず、力ノンはまだ動けずについた。このスリープはそこらの野生の敵とは違う。本能でそう感じ取っていた。

その証拠か、ユウキの放つ電撃はスリープに一度も命中してない。

だが

走っていたユウキに、スリープが背後から襲いかかるとしている。ユウキは気づいていない。

そう思つた瞬間に、身体が勝手に動いていた。

さつき掴んだ感覚。加速して、スリープの速度に追いつく。

「……“電光石火”！」

「ぐあつー！」

カノンに吹つ飛ばされたスリープが、呻き声を上げた。

「カノン……！」

「ごめんね、ユウキ。ボク……」

「最後まで言つなよ」

ユウキはちょっと怒ったような顔で言つた。

「貴様らあつー！」

起き上がつたスリープが叫びながら突つ込んでくる。

「今度こそ行くぞ、カノン」

「うんっ！」

「“電氣ショック”！」

戦つてゐる内に、コウキはある」とにぎりついていた。

スリープの予知夢が発動する直前、一瞬だけスリープの動きが止まるのだ。

つまり、その直後以外ならば攻撃が命中する、ということに。

さらにカノンが電光石火でちょこまかと動き回ることで、予知夢がなかなか使えないのだ。

コウキが勝てる、と確信に近いものを抱いた、その時。

突然コウキが、見えない手に持ち上げられたように宙に引っ張り上げられた。そして、一瞬だけ放物線を描きながらコウキの身体が宙を舞う。そのまま落ちはれば、その先は、崖。

「“体当たり”っ！」

スリープの仕業だ、と気づいたカノンがスリープに体当たりするど、コウキの軌道が一気に変わった。だが崖に落ちるのは免れたものの、岩に思いつきり叩きつけられたため、ダメージはやはり大きい。

「“電光石火”っ！」

カノンは自分の前に立ちはだかるスリープを電光石火の瞬発力で躰し、ユウキの元へ駆けた。

「ユウキ！？」

「う…ぐう…」

「駄目だね… とりあえずこれ食べて…」

トレジャー・バッグからオレンの実を数個取り出し、ユウキの横に素早く並べる。そしてスリープから弱つたユウキを守るよิに背を向け、身構えた。

「……“電光石火”つ！」

カノンはさつきと同じように電光石火で攪乱を始める。だが、実はカノンの体力もそろそろ限界に達しようとしていた。

電光石火のスピードで走り続けるには、それ相応の体力を要する。ほとんど止まっているスリープとは、消耗する速度が違います。おそらく、あと一発でもスリープの攻撃を受けてしまえば終わりだろう。そうでなくとも、このまま走り続ければそう長くは持たない。

「……“体当たり”！」

得意の体当たりで短期決戦を挑むが、焦っているせいかなか命中しない。スリープの動きに注意する余裕も無く、少しづつ体力が削られていく。

（ルリリが……）

怯えて逃げることも出来ずに隅で震えているルリリの姿が、カノンの眼に一瞬映った。

万が一の時はスリープと相討ち覚悟でルリリだけでも逃がそ
う。

「“電磁波”！」

そう思つたカノンの頭上を、青白い電撃の槍が通り抜けた。

「うつーーー？」

そしてそれはカノンの動きだけを見ていたスリープに見事命中し、
その動きを鈍らせる。

「カノン！ 今だつ……！」

「ウキの声だ。

「“体当たり”つーーー！」

今度こそ、渾身の体当たりがスリープに命中する。ユウキの電磁波で全身が麻痺してしまつたスリープは為す術も無く、カノンに吹つ飛ばされて昏倒した。

「はあつ、はあ……た、倒した……のかな？」

「そうみたい、だな……」

「あつ！ そりいえば…… ユウキ、大丈夫なの？」

「ああ。ボロボロで電磁波しか出なかつたがな」

イトマルと戦つた時に偶然習得した“電磁波”。電気ショックよりも弱い電撃を浴びせることで、相手を麻痺させる技だ。

「良かつたあ…… あれ？ ねえユウキ、あれつてジバコイル保安官と「イルたちじやない？」

「どうやらそりいしな…… とりあえず、これを連れてつてもらわなきやだな」

ジバコイルの姿を認めた一匹は、田を回しているスリープを放置してルリリの元へ。

「大丈夫？ どこか痛い所無い？」

「はい。大丈夫です」

「そつか、良かつた良かつた。それじゃあ帰ろつ。お兄ちゃんが待つてるよ」

「はい！」

ルリリを連れてしばらく坂を下ると、麓の地点が見えてきた。

「そろそろかな……あつ！ ルリリ！ お兄ちゃんがいるよ！」

「ルリリ！！」

一四が互いに走り寄つた。

「大丈夫か？」
怪我してないか？」

マリルはルリリを抱きしめると、心配そうに訊いた。カノンが笑顔で答える。

「大丈夫だよ。怪我していないよ」

——本當！？」

「ん！ どこも痛くないよ！」

「…………本當に難かっただよ」

ソニハヨウイサガシハ世物直ると
ウジリと頭を下にした

「カノンさん、ユウキさん、本当にありがとうございました。この恩は忘れません。……ほらルリリも」

「あつ……助けてくれてありがとうございました！」

マリルたちと別れてギルドに帰ると、交差点でジバコイルたちが待っていた。スリープはコイルたちの磁力によつて逃げられないようこなされているらしい。

「コノ度ハオ陰様テ、オ尋ネ者ノスリープヲ逮捕スルコトガ出来シタ！ ゴ協力感謝致シマス！」

「えへへ。ギリギリだつたけどね～」

「どーしてもお前は言わなきゃ分からんことを」とへ言ひかな……」

ユウキが嘆息した。

「賞金ハギルドー送ツテオキマス。アリガトウゴザイマシタ！」

「コイルたちが電子音を立てた。きっとそれが彼らの感謝表現なのだろう。

「スリープ。サア来ルンダ」

「トホホ……」

スリープが項垂れて、コイルに連行されて行つた。ユウキとカノンはそれを見送る。

「ふう……とりあえず、お尋ね者、たいほーーー！」

カノンが跳ねて叫んだ。その声は沈みかける夕陽に吸い込まれていぐ。

「逮捕……」

こんな時でもすぐにいつものハイテンションを取り戻すカノンに、
コウキはやつぱりついていけなかつた。

第8話 スリープ戦（後書き）

ユウキ「…………」

カノン「…………」

出来が酷いと言いたいのね。

カノン「スランプとはいえ酷…………」

すいません。きっとこれが凜月の実力なんですよええどりせどり

（r y

ユウキ「いじけるな」

うん（キラキラ 人生れつづポジティブシンキングだねつ！

……自分でやつてて痛いな。

そして、早ければ次辺りから本編から逸脱し始める予定です。

それでは！ 更新頑張るので見捨てないでくださいー（必死）

第9話 懐かに動き玉す影（前書き）

カノン……何があつたの？」

なんか最近2週間に1回っていう超絶ノロノロ更新が普通になりつつある……。

「ウヰー……なーく聞こえなかつたなー。もう一度言ひてくれば何でも無いよー……。

あ、そうだ。
今回明らかに繋ぎの回なので短いです。

でも次ちょっと痛感する予感。

まあ、どうあえず本編と二三……（はた）

第9話 密かに動き出す影

スリープ逮捕から数ヶ月後のギルド、親方部屋にて。

「やつたああああああああ！」

カノンが勢いよく飛び跳ねて、床がぎしぎしと音を立てた。

（この建物……大丈夫か？）

ユウキは喜びながら建物の心配をするという何とも複雑な表情を浮かべると、プクリンに訊いた。

「ゴールドランク、 へ昇進?」

「うん キニ達最近頑張つてゐるからね。さて、バッジ貸して」
脇に控えていたペラップが、一匹から半ばふんだぐるよじにして
バッジをブクリンの所へ持つていぐ。

「ありがとうペラシ。…………エーッと、どうかねえだつた。まあいいや」

そう言つと、プクリンは息を大きく吸い込んだ。

(来る！)

山火事を察知した野ネズミのような素早さで　いや、実際ネズミなのだが　耳を力の限り塞ぐユウキ。それを見たカノンも、フ

ルスピードで耳を塞いで丸まつた。

よそ見をしていて気付かなかつたペラッピが、不意打ちに耐えられずダウンした。

「はい！ これがゴールドランクのバッジだよ」

わあ…………

手渡されたバッジは、表についている球の色が変わっていた。
ンクの名前の通り、金色に輝いている。ラ

「これからも頑張つてね！……で、早速頼みがあるんだけど」

プリンは後ろにあつた箱から封筒を取り出し、ユウキに手渡した。表に足型文字が書かれている。

「それ、ツユクサタウンまで届けて来てくれないかな？」
不思議な
地図出して」

「村長さんに訊けば分かるはずだから。村長さんは村の中で一番大きい家に住んでるよ」

「分かつた。カノン、良いよな。……カノン？」

返事が無いのでコウキが横を見ると、カノンは身を乗り出してコウキの持つ封筒を覗き込んでいた。そのままの姿勢で、封筒を凝視している。

「……カノン？」

「……あ、ああ……何でもない。うん、届けてくれるよ」

「決まつたみたいだね。じゃ、頼んだよ」

話を終えたプクリンが後ろの箱をいじり始めたので、コウキとカノンは部屋を出た。既に外は薄暗くなっている。

「ところでカノン、何があつたのか？ 落ち込んではいな」よ。ただ、ちよつとね……」

「……ううん。落ち込んではいな」よ。ただ、ちよつとね……」

カノンは窓の外をちらりと見ると、静かな声で言った。

「……長い、話になるかもしね。けど、聞いて」

一方その頃、とある場所にて、一匹のポケモンが向かい合つていた。

「……はい、売」しました。あとは私にお任せ下せ」

「随分と余裕なのね……まあいいわ。それで上手くいくなら」

「ええ、大丈夫です。……ただ、>あれくが……」

「それは仕方無いわ。祈るしか方法は無いのよ」

「……お言葉ですが、私は不確定要素を完全に取り除きたいのです。
やはり>あれくは始末し……」

「いい加減にしなさい」

つかの間の静寂。

「>あれくは私が始末しないって決めたの。一応あなたは私に従つ
ている身でしょう？ これ以上言わせないで、ソルア」

「……分かりました、ルーシイ様」

ソルアと呼ばれたポケモンは恭しく一礼すると、その部屋を去つ
た。そして、呟く。

「……ルーシイ様、申し訳ありません。>あれくは……私たちにと
つて、存在してはならない者なのです」

誰も気付かない所で、事態はゆっくりと、だが確実に進行してい
た。

第9話 突かに動かす影（後書き）

いや、明らかに手抜きとか言わないで。

最初の一文とかぶん殴るぞコリコリとか言わないで。

でも最近思う。そもそも忘れられてる可能性大いにある気がする。

まあそれはおいといて。

最近TCP参加で二次創作が禁止になるとかいっ話を聞いて凄く怖いです。

今書いてるのなんてこんなに長いのに長続きしたの初めてなのに

いつだか青少年健全育成ナントカっていうのがありましたけどその時ぐらい怖いです。

まあ、中々のガキがこんなこと書いても仕方無いですけどね……。

では。

ああああああああああ
やつてしまつたあああああ
.....

「かわいいんだって」

ユウキ「相変わらずか。まあいい、放つところ」

えー

そして注意！ 今回なんかとつてもアレです。暗いです。

それでは本題……

「ウキ「じゃあ放つと」」

（いやそれ読み方変えないでええええ）

第10話 夕暮れの憂鬱

カノンに連れられて来たそこは、一辺が出会ったあの海岸だった。

「……カノン？」

「……一つ、頼みがある。ボクがどんなことを言つても、何を言わ
ないで聞いて」

「ああ。分かった」

「じゃあ、ボクの長い話を始めるよ」

えつと、何から話そつかな。まあ、とりあえずボクの故郷のこ
とから。

アクアフォレストつていつて、自然豊かでとっても綺麗な森なん
だけどね。ポケモンもいっぱいいて、自然を壊さないように家を造
つたりして幸せに住んでいた。

とある日、ボクはお母さんとシコクサタウンにお使いに行くよう
に頼まれた。

まあ、よくあることだし、特に何も思わず家を出た。

そしていつも通りお店で頼まれた物買って、ちょっと木陰で休ん
でた。アクアフォレストからシコクサタウンまでは結構距離があつ

て、疲れてたんだよね。

しばらく経つてそろそろ帰ろうつかなって思った時、町の笛がやけに騒がしいことに気づいた。おかしいなって思つて、やつての店主さんに訊いたんだけど、何故か店主さんは何も教えてくれなかつた。

仕方無いから帰ろうとしたら、すれ違いざまに聞いたやつたんだ。

アクアフォレストが、襲撃されたらしい つて。

ボクはその瞬間、全速力で走り出した。店主さんが血相変えて追いかけて来てたみたいだけど、その時のボクの目には映らなかつた。嘘でしょって笑い飛ばしたかったよ。でもさあ、それだと店主さんがボクに何も教えてくれなかつたのも分かっちゃうんだよね。店主さんはボクがアクアフォレストに住んでるって知つてたし。

走つて走つて走つて、やつと着いたそこは もづ、ボクの住んでる森じゃなくなつてた。炎が上がつて、悲鳴とか怒鳴り声が飛び交つてた。ボクの家ももう、燃えて無くなつてた。

近くを無我夢中で探したけど、お父さんもお母さんもお姉ちゃんも弟もどこにもいなかつた。友達も誰もいなかつた。ボクはもう、その場に崩れ落ちることしか出来なかつたよ。

でもその時、どこから話し声が聞こえてきた。知つてる人かもしないと思つて飛び出そうとしたんだけど、その声は明らかに笑つてた。ボクはその瞬間身を翻して、近くにあつた千年樹の陰に隠れた。

「この森に住む皆が、森が燃えてるのに笑ってるさうが無いもん。敵だ、つてすぐ分かったよ。」

その声の主は、笑いながら千年樹の前を通り過ぎて行つた。足音が完全に聞こえなくなるまで、ボクはずつと小さくなつて震えてた。怖かったよ……。

そしてボクは、一応誰もいないことを確認して一田散に駆け出した。もう近くまで火が回つて来てたのもあつたけど、あの連中の会話 今も、鮮明に覚えてる。

“千年樹の近くに住むイーブイの小娘を捕らえられなかつた”つて。

一瞬何のことか分からなかつたけど、千年樹の近くに住む一家と言えばボクらだつた。お姉ちゃんはイーブイじゃなくてもうエーフィに進化してたから、ボクしかいないよね。

またボクは走つて走つて走つて、今いる場所がどこか分からぬのに走つた。出来る限り遠くに逃げなきゃいけない。それだけを考えて走り続けて、とうとう限界が来た。

ああ、ボクは死ぬんだろうな そう思つた。不思議と冷静だったよ。でもあの連中に殺されるのは嫌だなとか、そんなこと考えてた。

奇跡的に目が覚めたボクの視界には、ピンク色のポケモンとカラ

フルな羽を持つたポケモンがいた。

「四の話をまとめると、どうやらボクは倒れてるところを助けられたらしい。

そう、お察しの通りあのギルドのブクリン親方とペラップだよ。

一人に名前を聞かれて、咄嗟にリリアって名乗つた。命の恩人だけど、まだ警戒を解くことが出来なくてね……。

しばらくお世話になつた後、ペラップに言われて海岸に移り住んだ。ほら、あのサメハダーミたいな形した崖があるでしょ？ あの口の中が部屋みたいになつてるんだよ。

ブクリンに敵が来るかもしれないって言つたら、ブクリンはアクアフォレストの襲撃事件を極秘裏に調査することと、情報が入つたら知らせに来てくれる約束してくれた。

そして数日後、ボクは海岸で倒れているユウキを見つけた。

ユウキは元ターンゲンだつたとかよく分からない部分もあつたけど、でも何故か敵には見えなかつたし、それどころかボクを変えてくれる気がした。

だから、こう言つた。

「ボクは、カノン」

終始歌うような口調で語るカノンの双眸からは、ぽろぽろと大粒の涙が溢れ出していた。

それがユウキには、辛いのに、悲しいのに、自分のためにわざと明るく振舞っているようにしか見えなかつた。

ユウキは語り終えたカノンの頭に手を伸ばし、その手を置いた。出来るだけ真剣な眼差しで問いかける。

「カノン　　お前は、何で探検隊にならうと思つたんだ？」

カノンは一瞬吃驚したようだつたが、すぐに微笑んで言つ。

「ボクの故郷、……アクアフォレストを、取り戻せたらいいなつて、思つたから」

「それなら　　絶対に、その願い叶えよつぜ」

「……うん！」

「ほら、そろそろ夕飯だから涙拭け。俺がいじめたとしても思われたらたまつたもんじやない」

「……わざと拭かないで行こうかなあ……」

「お前……」

一番星を背に、一匹は笑いながらギルドへ走つた。

第10話 夕暮れの憂鬱（後書き）

うわーもうなんか嫌だ

そして何気なく更新早かつたのでそれで許して〜（殴蹴刺

さて、本編を完全に逸れたので凜月は暴走を開始……げふんげふん、
ちゃんとやりますから殴らないで。

さて余談ですが、凜月の所属している文芸部がなにうでの活動を開始しました！

今はなんだかRPGっぽい感じのファンタジーを上げていく予定です。

向こうでは凜月は燐音といつ名前になっています。

興味と暇がある方は「文芸开花」でヨーザ検索ボタンをぽちっとな
(古い?)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456w/>

ポケモン不思議のダンジョン 絆の探検記

2011年11月20日01時15分発行